

プラド美術館展 ベラスケスと絵画の栄光

TEXT= YUKIKO IIO
写真はすべてプラド美術館蔵
© Museo Nacional del Prado

DIEGO VELÁZQUEZ

[EL PRÍNCIPE BALTASAR CARLOS, A CABALLO]

Hacia 1635. Óleo sobre lienzo, 211,5 x 177 cm.
ディエゴ・ベラスケス《王子バルタサル・カルロス騎馬像》(部分)
1635年頃 マドリッド、プラド美術館蔵 (図7)

本展の特色

プラド美術館は歴代スペイン国王のコレクションを核として1819年に開館した世界有数の美の殿堂として知られている。16世紀のカルロス1世(在位1516-1556)(=神聖ローマ皇帝カール5世)に始まる王室コレクションは、美術愛好家であった次代のフェリペ2世(在位1556-1598)によってその礎が作られ、さらにその孫でやはり美術に極めて高い関心を寄せたフェリペ4世(在位1621-1665)の熱心な蒐集により、質・量ともに優れたものとなった。このフェリペ4世の治世に、ティツィアーノやヴェロネーゼをはじめとする16世紀ヴェネツィア絵画、ルーベンス、ヴァン・ダイクなどの17世紀フランドル絵画、17世紀イタリア絵画等、当時の一級品がコレクションに加わったが、フェリペ4世のコレクションの質をさらに押し上げたのが彼の宮廷画家であったディエゴ・ベラスケス(1599-1660)の作品であった。このたびの「プラド美術館展 ベラスケスと絵画の栄光」では、プラド

美術館の誇るベラスケスの作品が初公開作品を含め7点出品される。日本国内で過去4回、プラド美術館の作品を紹介する展覧会が開催されているが、ベラスケスの作品がこれほど多く、しかも全身像を含む大型作品が出品されるのは初めてのことであり、これが本展最大の見どころといえる。ベラスケスの作品だけでなく、リベラやスルバランといったスペイン絵画の巨匠、ティツィアーノやルーベンス、クロード・ロランなどの傑作も綺羅星の如くリストに名を連ねており、これらの作品も必見であろう。

展覧会は、このベラスケスの作品を軸に、フェリペ4世の治世下を中心とするスペイン宮廷をめぐる国際的なアート・シーンを再現しようとするもので、ベラスケスを含むスペイン、イタリア、フランドル、フランス、オランダの画家の作品61点と、美術に関する書籍9点の計70点が出品される。

VELÁZQUEZ
AND THE CELEBRATION OF PAINTING:
THE GOLDEN AGE IN THE MUSEO DEL
PRADO

ベラスケスとスペイン絵画の諸相

展覧会構成

展覧会は「芸術」「知識」「神話」「宮廷」「風景」「静物」「宗教」という7つの章をもうけ、さらに、当時の芸術理論等を記した貴重な書籍資料を紹介するという構成をとっている。ベラスケスがこれらの主題をどのように解釈し、絵画化したのか、主題に対するアプローチにおけるその独創性を際立たせるべく、「静物」の章と書籍以外にベラスケスの作品が含まれている。ベラスケスの作品を他の画家一異なる国や流派一の作品の中で眺めたとき、その表現の特徴がおのずから明らかになるはずである。それゆえ、ベラスケスの各作品は展覧会の中で年代順の配列とはなっていないが、ベラスケスを核に17世紀に黄金時代を迎えたスペイン絵画の諸相を一望できる内容となっている。



CLAUDIO DE LORENA
[PAISAJE CON EL ENTIERRO DE SANTA SERAPIA]

Hacia 1639. Óleo sobre lienzo, 212 x 145 cm.
クロード・ロラン《聖セラピアの埋葬のある風景》1639年頃
マドリッド、プラド美術館蔵





DIEGO VELÁZQUEZ [ADORACIÓN DE LOS REYES MAGOS] 1619. Óleo sobre lienzo, 203 x 125 cm. ナショナル・ギャラリー（東京）三階上の礼拝堂（2019年）ナショナル・ギャラリー美術館蔵（2019）



FRANCISCO DE ZURBARÁN
[CRISTO CRUCIFICADO, CON UN PINTOR]

Hacia 1650. Óleo sobre lienzo, 105 x 84 cm.
フランス・スコデ・スルバラン（陸刑のキリストと画家）1650年頃 マドリド、プラド美術館蔵



PEDRO PABLO RUBENS
[LA SAGRADA FAMILIA CON SANTA ANA]

Hacia 1630. Óleo sobre lienzo, 116 x 91 cm.
ペーテル・パウル・ルーベンス（聖アナのある聖家族）1630年頃 マドリド、プラド美術館蔵

ベラスケスは1599年、アンダルシアの大都市セビーリャに生まれた。父はポルトガルから移住したイダルゴ(郷土)の2代目であった。当時のセビーリャは人口約10万人、新大陸交易の中心都市として経済的繁栄を謳歌し、修道院や聖堂がいくつも創設され、「南のアテネ」「アンダルシアのフィレンツェ」と呼ばれ美術も隆盛を極めていた。11歳の頃セビーリャ画壇の主要画家であったフランシスコ・パチェーコの工房に入り、以後6年間絵画の修

業を積み、深い学識と美術理論に精通した知識人でもあったこの師の下で幅広い教養と道徳を身につけたとされる。このセビーリャ時代の作品として今回出品されるのが第7章「宗教」で展示される《東方三博士の礼拝》(1619年 図1)である。強い明暗のコントラストを効かせた彫塑的な人物表現がみられるベラスケス初期の傑作であるが、なによりも本作品の特徴は、ごく身近な人々をモデルとして人物が描かれ、宗教画でありながら非常

に現世的な性格が強くあらわれていることである。主題が何であれ、極めて現実的な精神はその後のベラスケスの作品に通底する特質である。

1623年マドリードを訪れ、フェリペ4世の肖像画を描く機会を得、その才能が認められ24歳でフェリペ4世の王付き画家となった。王に仕える画家としてだけでなく王の私室取次係に任命され、以後フェリペ4世に廷臣として生涯仕えることになった。1629年からイタリアへ旅

ベラスケスの生涯と出品作品

DIEGO VELAZQUEZ [FELIPE IV, CAZADOR] 1632 - 1634. Óleo sobre lienzo, 189 x 124 cm. フェリペ4世の肖像(狩猟服姿のフェリペ4世)1632-34年 マドリード、ナショナル美術館 (図5)





DIEGO VELÁZQUEZ
 [JUAN MARTÍNEZ MONTAÑÉS]

Hacia 1635. Óleo sobre lienzo, 109 x 88 cm.

ディエゴ・ベラスケス《フアン・マルティネス・モンタニェースの肖像》1635年頃
 マドリード、プラド美術館蔵（図2）



DIEGO VELÁZQUEZ
 [EL NIÑO DE VALLECAS]

1635 - 1645. Óleo sobre lienzo,
 107 x 83 cm.

ディエゴ・ベラスケス《バリエーカスの少年》1635 - 45年
 マドリード、プラド美術館蔵（図6）

行、ローマに1年間滞在する。マドリードに帰還後は活発な制作活動を行い、フェリペ4世時代最大の造営事業であったブエン・レティエーロ宮、マドリード郊外に建設されたトーレ・デ・ラ・パラダ（狩猟休憩塔）の内部を飾る一群の絵画を制作した。この時期は最もベラスケスが多作であった時代であり、本展では出品作中6点の作品、《フアン・マルティネス・モンタニェースの肖像》（1635年頃 第1章「芸術」図2）、《メニッポス》（1638年頃 第2章「知識」図3）、《マルス》（1638年頃 第3章「神話」図4）、《狩猟

服姿のフェリペ4世》（1632—34年 図5）《バリエーカスの少年》（1635—45年 図6）（ともに第4章「宮廷」）、《王太子バルタサル・カルロス騎馬像》（1635年頃 第5章「風景」図7）がこの時代に制作されている。

《メニッポス》、《マルス》、《狩猟服姿のフェリペ4世》はトーレ・デ・ラ・パラダのために描かれたものである。前者2点は著名な哲学者、軍神をそれぞれ描きながら、理想化した姿ではなく日常どこにでもいるような人物として描かれており、ここでも主題を現実世界の事象、人物

に置きかえて描こうとする態度が顕著である。

《バリエーカスの少年》は当時の宮廷で「慰みの人々」としての役割を与えられて王家に仕えた矮人を描いた作品である。王太子バルタサル・カルロスの遊び相手であった少年の一瞬の表情やその身体的特徴をリアルに描き出しているが、そこには彼を国王の肖像と変わらぬ一個の尊厳ある人間として見ようとする画家のまなざしがあり、観る者の胸を打つ。

DIEGO VELAZQUEZ [MARTE] Hacia 1638. Óleo sobre lienzo, 179 x 95 cm. [アムステルダム国立美術館\(オランダ\)](#) 1638年頃。アムステルダム国立美術館蔵 (国)



ベラスケスの生涯と出品作品



Diego Velázquez [MENIPO] 74 x 117 cm, オイル、ベラスケス(亡年没後)1638年頃 74 x 117 cm、プラド美術館蔵(図3)

本展のメインイメージとしても取り上げている《王太子バルタサル・カルロス騎馬像》はフェリペ4世の長男で王位継承者であったカルロス王太子の肖像画であり、プエン・レティーロ宮の「諸王国の間」を飾るために両親である国王夫妻の騎馬像とともに描かれた作品である。「風景」の章に入っているのは王太子の背後に描かれた卓越した風景表現ゆえである。マドリド郊外、グアダラマ山脈を彼方に臨む広大な景観を、前景から後景へ青みを増していく色彩の微妙な諧調で描写しており、風景表現にも傑出したベラスケスの資質を余すところなく示している。この頃になると、初期の作品における強い明暗のコントラストによる重厚な人物表現は見られなくなり、透明度の高い色彩を用い、素早い筆致を重ね、対象の表面に降り注ぐ光のきらめきや質感を描き出そうとする試みが行われるようになる。

1648年、ベラスケスは2度目のイタリア旅行に赴く。16世紀イタリアの巨匠たちの絵画や古代彫刻を買い付ける命を受け、ローマのメディチ家のヴィラを拠点に収集活動を行う一方で、ローマ教皇インノケンティウス10世の肖像画やヴィラ・メディチの庭園を描いた風景画など名作を残している。1651年に帰国し、翌年王宮配室長という要職に就き、多忙な公務の傍らウィーンのオーストリア・ハプスブルク家に嫁ぐことが予定されていたフェリペ4世の娘マルガリータ王女の肖像や、生涯の傑作《ラス・メニーナス》(1656年)、《ラス・イランデーラス》(1657年頃)を制作した。没する前年の1659年にはサンディアゴ騎士団への加入が認められるという栄誉に浴したのだった。

ベラスケスは多作の画家ではなく、1623年以降、生涯フェリペ4世の宮廷で制作を続けたため、19世紀後半に印象派の画家エドゥアル・マネによって「発見」されるまでスペイン国外で広く知られた存在ではなかったという。しかし近代における発見はベラスケスの近代性を示す証左となる象徴的な出来事であったといえるだろう。対象の貴賤に関わらず率直で真摯なまなざしを向ける画家としての姿勢、一見単なる色の染みにしか見えない斑点が一定の距離で眺めたときに像を結ぶというような、人間の視覚についての認識、あたかも現実空間と交錯するかのよう仕組まれた巧みな空間構成など、近代絵画へと続く諸要素、先見性をベラスケスの絵画は内包している。このような絵画への知的な取り組みと同時に、描かれた作品は決して冷たいリアリズムではなく、現実への飽くなき関心にもとづく深い人間性への洞察に満ちている。これこそがベラスケスの絵画が今日の我々を魅了してやまない理由なのではないだろうか。本展はプラド美術館からベラスケスの作品をはじめ17世紀スペインにおける絵画の栄光を具現した傑作が多数出展される奇跡のような展覧会である。日本での邂逅を筆者も心待ちにしている。

飯尾 由貴子 / Yukiko Iio
 兵庫県立美術館 企画・学芸部門マネージャー兼保存修復グループリーダー
 京都大学文学部卒業。同学大学院文学研究科修士課程修了。財団法人松伯美術館学芸員を経て98年より兵庫県立美術館学芸員。近年の担当展覧会は「フィンランドのくらしとデザイン展」(2013年)、「生誕130年橋本関雪展」(2013年)、「細文字展」(2015年)、「生誕180年記念 富岡鉄斎展」(2016年)など。

プラド美術館展
 ベラスケスと絵画の栄光

【東京展】
 2018年2月24日(土)～
 5月27日(日)
 国立西洋美術館 | 上野公園
 〒110-0007 東京都台東区上野公園7-7

【兵庫展】
 2018年6月13日(水)～
 10月14日(日)
 兵庫県立美術館 | 神戸市
 〒651-0073 兵庫県神戸市中央区脇浜海岸通1丁目1番1号[HAT神戸内]

読者プレゼント

「プラド美術館展 ベラスケスと絵画の栄光」
 東京展・神戸展の観覧券をそれぞれ
 抽選で10名様にプレゼント!

ハガキまたはe-mailの件名に「プラド美術館
 展観覧券」と明記の上、郵便番号、住所、
 氏名、電話番号、「acueducto」の感想を書
 いて下記までお送りください。
 ※神戸展の観覧券の発送は3月以降になります。

応募先:〒530-0001 大阪市北区梅田
 2-5-8 千代田ビル西別館2F
 有限会社ADELANTE
 「acueducto 編集部」
 応募締切:2018年2月22日(木)消印有効

ベラスケス 宮廷画家で宮廷人



西川 和子 / Kazuko Nishikawa

早稲田大学理工学部卒。特許庁にて審査官、審判官、審判長を歴任。現在スペイン史著述家。著書に『スペイン宮廷物語』『狂女王アナ』『オペラ「ドン・カルロ」のスペイン史』『宮廷人ベラスケス物語』『スペイン謎解き散歩』『スペイン レコンキスタ時代の王たち』など。

宮廷画家への道

1621年、スペイン国王フェリペ4世が即位し、寵臣として絶大な力を振るい始めたのがセビーリャ出身のオリバーレス伯公爵でした。そんなとき宮廷画家の1人が死去し、その穴を埋めるため、同郷の若き画家ベラスケスがマドリッドに呼ばれたのです。試しに描いた王

の侍従の肖像画は宮廷で評判となり、ベラスケスは晴れて国王付き画家となりました。

ちょうど、外交官としてスペイン宮廷を訪れていたフランドルの画家ルーベンスと知り合い、王室コレクションにある巨匠ティツィアーノの絵をともに見たといいます。さらにルーベンスからはイタリア行きを勧められ、神話画を描くことの重要性も教えられました。ベラスケスに新しい世界が開けてきたのです。

どんな絵を描いた？

当初は国王フェリペ4世や王家の人物を描いていましたが、イタリア旅行を経て、『ウルカヌスの鍛冶場』など、神話画も描くようになっていきます。

この絵は、鍛冶の神ウルカヌスのところにアポロ神がやってきて、「あなたの奥さんは浮気をしているよ、相手は戦いの神マルスだよ」と伝えたその瞬間を描いた

ものでした。

帰国すると、イタリア滞在中に誕生した王太子バルタサル・カルロスの肖像画をはじめ、限りなく美しい宗教画《十字架上のキリスト》、神話画《マルス》や《ヴィーナス》、宮廷の道化師たちや歴史画など、精力的に描いていきました。

と同時に、ベラスケスには、宮内警吏、王の衣装係、王室侍従代など、宮廷人としての地位が次々と与えられ、王と接する機会も増えていったのです。

宮廷人として

フェリペ4世の芸術好きはますます盛んとなり、マドリッドのはずれにプエン・レティーロ宮殿を建設し、マドリッド近郊にある狩りの休憩塔トーレ・デ・ラ・バラダも拡張しました。それらの建物を装飾するため、新たに大量の絵が必要です。ベラスケスの大作の1つ《プレダの開城》はこの新たな宮殿を飾る戦勝画であり、王や王妃や王子たちの豪華な《騎馬像》も、王国の威厳と栄光を表すものとしてこの宮殿に置かれたのです。

一方、《狩獵服姿》の王や王子は、神話画や動物画とともに、休憩塔を飾る絵でした。王の道楽はさらに続き、古い王宮の改修や、祖父フェリペ2世が長年かけて建設したエル・エスコリアル修道院にも手を付け始めたのです。

あれもこれもとなってくると、王の好みを理解し、言わなくてもそれを形に表せる人物が必要でした。まさにそれがベラスケスだったのです。宮廷人としての地位も、いわゆる叩き上げのトップといえる王宮配室長を授かり、いつの間にか、王が心の内を吐露できる、数少ない臣下の1人となっていたのです。

《ラス・メニーナス(宮廷の女官たち)》

ベラスケスの最高傑作といえば《ラス・メニーナス》でしょう。これは「マルガリータ王女の日常の1コマを表した絵」とされています。その通りなのですが、ではどうして、普通の肖像画ではなく大勢が登場する「日常の1コマ」の絵が必要だったのでしょうか。私はこれを、王位継承についてのフェリペ4世の心の内を描いた絵、と考えています。

この絵が描かれた1656年頃、王太子バルタサル・カルロスは既にこの世を去り、王家の子は、前王妃の娘マリア・テレサと、現王妃の娘マルガリータだけでした。現王妃マリアナは、マルガリータの次にも女の子を生みますが育たず、次の子は死産でした。フェリペ4世もすでに50歳を過ぎ、「男子が欲しい、しかし、もう生まれないうちかもしれない」と、王位の行方について不安

がよぎり、「であるなら、次期王位はマリアナの生んだマルガリータに」と密かに決めていたのです。

そんな時に描かれたのがこの絵でした。「マルガリータを中心にした我が家族の絵を」という王からの命令だったので。当初《フェリペ4世の家族》と題されたこの絵は、中央にマルガリータ王女を描くことで王位継承についての王の意志を表し、王女は臣下たちに囲まれ女官たちに会釈され、それを王夫妻が鏡の中から見守っているのです。絵の中に描かれた大きな画布は、それを証明する役目だったのです。

しかしその後、フェリペ・プロスペロやカルロス(2世)という、フェリペ4世に王位継承の男子たちが生まれ、この絵は《宮廷の女官たち》と名前を変え、王位継承とは何の関係もない絵として残されたのでした。

本作品は「プラド美術館展 ベラスケスと絵画の栄光」には出品されません。

DIEGO VELAZQUEZ [LAS MENINAS]

1656. Olio sobre lienzo. 318 x 276 cm. プラド美術館蔵

